

【書評】

HARA, Fujio

The Malayan Communist Party as Recorded in the Comintern Files
(Strategic Information and Research Development Centre, 2017)

鈴木陽一

I

本書はコミンテルン本部のファイルにあったマラヤ共産党関連の文書の内容を時系列に沿って紹介し、ほかの史料や先行研究も援用しながら、そこから窺える当時のマラヤ共産党の活動についてまとめたモノグラフである。2017年にマレーシアで出版され、華語版も続いて同国で出版された（原，2017）。

コミンテルン（Comintern）は「プロレタリア独裁と国際ソビエト共和国の樹立」（共産主義インターナショナル規約第1条）をめざし、その支部となった各地の共産党を指導するなどして国際共産主義運動を指導した組織である¹。資本主義国際秩序とこれを覆そうとする国際共産主義運動との対立は20世紀国際関係史の基調の一つを形成したが、そのことはマラヤ史についても言えた。国際共産主義運動はマラヤ共産党を生み、同党は弾圧を受けながらも反植民地主義運動を繰り広げた。第二次世界大戦中には抗日運動の主力を担い、戦後には植民地政府の転覆を狙うゲリラ戦を展開した。そうしたなか、イギリスは、共産主義に勝利するため、連盟党との協力関係を築いてこれに主権を委譲したのであった。

マラヤ共産党の戦前の活動全般については、C. Y. ヨンの労作『マラヤ共産主義の起源』がある。同書では南洋華人のあいだに共産主義思想が広まり、その後、中国共産党の一部として南洋臨時委員会がつくられ、これが独立してマラヤ共産党となって成長していく過程が明かにされている。これはインタビュー調査並びに特別に閲覧が許可されたと思われる公安警察関係史料に基づいて書かれた（Yong, 1997）。しかし、ヨンの研究には課題も残った。マラヤ共産党が中国共産党から独立してコミンテルンの一部となったことははっきりしたもの、コミンテルン本部の史料を用いなかったため不確定な記述が残り、さらにマラヤ共産党の活動が国際共産主義運動のなかでどう位置づけられるかといった論点についてはほとんど触れることができていないのである。その後、栗原、ベログロヴァによっ

¹ コミンテルンは共産主義インターナショナル（Communist International）の略称である。第三共産主義インターナショナル（The Third Communist International）とも呼ばれた。

てコミンテルン本部の文書を用いたコミンテルン指導下の東南アジア共産党についての研究が進められた（栗原，2005，Belogurova，2014a；2014b）が、マラヤ共産党の戦前の活動についてはやはりわからない点が多かった。本書は、こうした研究の流れを受け、コミンテルン本部の文書やそのほかの史料を吟味することでマラヤ共産党の戦前の活動の重要な点を端的にまとめた通史となっている。

II

以下では、本書の内容を順を追って要約する。

「序」 コミンテルン文書を用いたマラヤ共産党史の研究が現れるようになっているけれども、総合的に利用した研究はまだ出ていない。「マラヤ共産党の起源と設立」「マラヤ共産党とコミンテルン本部とのやりとり」「マラヤ共産党内にあった論争・分裂」「労働組合運動とマラヤ共産党」などの論点が十分に解明されていない。

「第1章 マラヤ共産党以前の共産主義者組織」 コミンテルン文書においては、事後的にまとめられた文書（1942年）にマラヤでの最初の共産主義集団の設立は1925年のことであったとの記述もあるが、設立期の文書に拠って考えれば、マラヤ共産党の直接の前身であった中国共産党南洋臨時委員会の設立は1928年の早い時期であったことが推察される。同委員会はマレー共産党とも呼ばれた。当初、靴製造工場のストライキを行うなど闘争路線をとったが失敗し、方針を改めた。委員会はタイ共産党設立にも関わった。

「第2章 マラヤ共産党の形成」 マラヤ共産党の設立日についても諸説あるが、同じく設立期の文書に拠って考えれば、設立の予備会合日が1930年4月22-23日、公式会合日が5月21日であったことが推察される。公式会合には、知られているとおり、ホー・チミン（Ho Chi Minh）も参加し、同党がめざす「マレー」の革命はブルジョア革命であること、同党はマラヤの人々から構成される必要があることなどが確認された。マラヤからコミンテルン本部への報告には、12月時点の党員数は1220名、共産党系労働組合員数は6000名だとの文書がある。

「第3章 マラヤ共産党とコミンテルン 1930年」 コミンテルン極東局（上海に置かれた）はゼネスト・武装蜂起などの手段は現状では使うべきではなく、経済闘争に重点を置くべきとし、また華人、マレー人、インド人はマラヤ解放のために団結すべきとしていた。しかし、極東局とマラヤ共産党の連絡は中国共産党を介してのもので、直接の連絡は取れていなかった。

「第4章 マラヤ共産党とコミンテルン 1931年」 この当時、マラヤ共産党はマレー系住民、インド系住民との接触をあまりしないまま、ゼネスト・武装蜂起などの手段に訴えようとしていた。その後、過激路線は改められたが、心配したコミンテルン極東局は3名の要員を送った。しかし、彼らは逮捕されることになった。

「第5章 マラヤ共産党とコミンテルン 1932-1934年」 事件後、コミンテルン本部の文書はめっきり少なくなるが、それでも連絡は取られていた。コミンテルン本部は、インドネシア、ビルマ、タイの共産主義勢力を指導すること、政治局にマレー人、インド人も含めることなどの指令をマラヤ共産党に出している。

「第6章 マラヤ共産党とコミンテルン 1935-1939年」 1935年の文書には、これより前の1年半のあいだ連絡がないため、マラヤ共産党をコミンテルン支部としては承認しなかったという旨の記事がある。マラヤ共産党はコミンテルンの正式な支部ではなかったということになる。事後的な記載に拠るが、この頃から党内で派閥抗争が発生したらしい。また、1936-1938年の文書はコミンテルンのファイルにない。1939年4月、マラヤ共産党は十大綱領を採択した。これは、イギリスを追い出すことに言及せず、平和愛好国との連帯を進めるというものでコミンテルン本部の意に反するものであった。

「第7章 マラヤ共産党とコミンテルン 1940-1942年」 1940年1月にマラヤ共産党は緊急十大綱領を採択した。これはマラヤからイギリスを追い出して独立した民主国家をつくるという項目を含むもので前年の綱領を修正したものであった。コミンテルン本部は1942年1月頃までシンガポールのマラヤ共産党の様子を把握していたようである。マラヤ共産党がイギリスに譲歩しすぎていること、マレー系住民・インド系住民への工作が軽視されていることに不満を持っていたようである。しかし、こうしたコミンテルン本部の意向はマラヤ共産党に伝わらないままシンガポールは陥落することになった。

「結論」 マラヤ共産党の歴史を振り返ると、次のようなことが指摘できる。

- ・1928年に中国共産党南洋臨時委員会が設立され1930年にマラヤ共産党として独立した。
- ・コミンテルン本部とマラヤ共産党とは上海の極東局を通して結びついていたが、イギリスの妨害などあってその間の連絡はなかなかうまくいかなかった。
- ・コミンテルン本部はマラヤ共産党に武装闘争を指令することはなかった。マラヤ共産党は、設立当初、武装蜂起や組合によるゼネストの重要性を説いたが、これはコミンテルン本部からの厳しい非難を招いた。
- ・日中戦争が始まると、マラヤ共産党内には植民地当局との関係において強硬路線を採る左派と穏健路線を採る右派とが現れた。結局、日本のマラヤへの侵略が現実となるなか、マラヤ共産党はイギリスとの共同戦線路線を採り、穏健派にしてイギリスのエージェントであるライ・テク（Lai Teck）が権力を握ることになった。
- ・コミンテルンの指令は具体性や正確さに欠くところもあった。それゆえ、皮肉なことに、両者の関係が切断されてからマラヤ共産党は——主に華人のあいだではあったけれども——その勢力を拡大させることになった。

III

本書の最大の貢献は国際共産主義運動が最も組織立って展開されていた時代におけるその本部——コミンテルン本部——と南洋の拠点——マラヤ共産党——との関係をほかの研究者も参照可能なかたちで明らかにしたことである。これまで推測・指摘されていたことが確認された点、あるいはあまり知られていなかったことが明確となった点のうちとくに重要なこととしては、評者が考えるに、結論においても示された次の三点をあげることができる（紙数の都合上、これら三点は上記結論の要約では省略した）²。

一点目は、この間、マラヤ共産党に期待され、そしてマラヤ共産党が定めていた当面の目標についてである。それはイギリス帝国主義を打倒するブルジョア革命であった。コミンテルンが西欧植民地における革命の最初の段階は共産主義革命にならないだろうと考え、帝国主義を打倒するためにブルジョア民族主義者の協力もまた有益であると考えていたことはよく知られている（村田, 1978: 250—253: 第2回コミンテルン大会「民族・植民地問題についての補足テーゼ」1920年7月28日）。植民地においては民族主義者と組んで宗主国を追出し、ブルジョア革命を実現しよう、との趣旨であり、そのことは本書でも確認された。また、第二次世界大戦が近づくと、マラヤ共産党はイギリスとの協調関係に入ろうとしたものの、コミンテルン本部は終始これに批判的であったことも確認された³。

二点目は、この間、国際共産主義運動がマラヤ共産党に期待していた役割についてである。コミンテルン本部は中国共産党からマラヤ共産党を独立させ、これがインドネシア、タイ、ビルマの共産党を指導し、南洋の国際共産主義運動の中心拠点となることに終始一貫期待を抱いていたということが判明した。このことは、著者の前著（原, 2009）などと照らし合わせて考察すると、コミンテルン解散後のマラヤ共産党とそれを取り巻く各国共産党には見られない特徴と言えるだろう。

三点目は、コミンテルンは終始マラヤ共産党がマルチエスニックな党になることを指令していたにもかかわらず、これが実現しなかったという事実である。マルチエスニック化はコミンテルンが中国共産党から切り離してマラヤ共産党を組織した目的の一つであったとも推察される（pp. 37—38）。

² なお、本書は史料に関わる課題を抱えているように思われる。著者は本書を執筆するにあたって一次史料を用いたが、いずれの文書も直接入手しようとしなかった。利用可能な分のみとはいえ、コミンテルン書記局に残る文書のうちマラヤに直接関わる文書がわずか170頁のみであったとする本書の前提については分量が少なすぎるとの感が残る。

³ 1930年代、ソビエトはいわゆるリトヴィノフ外交を展開し、英仏と反ファシズム共同戦線を形成しようとした。しかし、コミンテルン文書の分析の結果、コミンテルンはアジアなどにおいて反植民地主義（つまり英仏の植民地支配の転覆）を貫こうとしていたことがわかり、共同戦線というソビエトの外交政策はコミンテルンの方針と齟齬をきたしていたという事実が指摘が出されるようになっていた（Vatlin and Smith, 2014: 196）。

改めて考えさせられるのは、きわめてインターナショナルなはずのネットワークからきわめてナショナルな組織が生まれたという巨大な逆説についてである。コミンテルンは各地に自らの支部である共産党を置いた。それらのなかには、弾圧で壊滅したものもあれば、政権を獲得したものもあった。ところがそうして各地にしっかり根付いた共産党はきわめてナショナルな性格を帯びることになった。現在では、共産党が民族解放をめざしてきたことを強調する解釈が各国の共産党に好まれるようになり、各国共産党が純粋な国益をめぐってその間で衝突を起こすこともまれではなくなっている。本書はマラヤにおける初期の共産主義運動を明らかにしており、この問題についても考えさせ、今後の研究を促す内容となっている。国際共産主義運動はかなり早い段階からエスニシティやネーションの壁に悩むところがあった⁴。他方、モスクワの統制がよく効いたとされるコミンテルン時代においても、中央とマラヤの活動の現場との連絡がとりづらく、必然的に現場の裁量の余地を大きくしていたであろうこともよくわかった。そうしたことはナショナリストの共産党入党とその民族政党化に寄与したのかもしれない。いろいろな考えが浮かぶが本書のうえにさらなる研究が現れることが期待される。

〈参考文献〉

- 栗原浩英 (2005) 『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』 東京大学出版会。
- 原不二夫 (2009) 『未完に終わった国際協力 マラヤ共産党と兄弟党』 風響社。
- 村田陽一 (1978) 『コミンテルン資料集 1 1918-1921』 大月書店。
- Belogurova, Anna (2014a) "Communism in South East Asia," Smith, Stephen A., ed., The Oxford Handbook of the History of Communism, 236-251, Oxford University Press.
- (2014b) "The Chinese International of Nationalities: The Chinese Communist Party, the Comintern, and the Foundation of the Malayan National Communist Party, 1923-1939," Journal of Global History, Vol. 9, No. 3.
- Vatlin, Alexander and Smith, Stephen A. (2014) "The Comintern," Smith, Stephen A., ed., The Oxford Handbook of the History of Communism, 187-202, Oxford University Press.
- Yong, C. Y. (1997) The Origins of Malayan Communism, South Seas Society.
- 原不二夫 (2017) 『共产国际档案关于马来亚共产党的纪录』 21 世纪出版社。

(すずき・よういち 下関市立大学)

⁴ コミンテルンはエスニシティやネーションを超越した組織となるはずであったが、マラヤ共産党はネーションはおろかエスニシティの超越において躓いたと言える。